

## 誰も被害者にも加害者にも、傍観者にもならないために

～子どもたちが寄り添い支え合ういじめ防止プログラム～

瀧田 信之  
(特定非営利活動法人湘南DVサポートセンター理事長)

私たちは13年前に開始したドメスティックバイオレンスの被害者支援をとおし、暴力のある家庭に育つことが、子どもたちをどれだけ不安にし、悲しませ、一生苦しめてしまうことを彼ら自身から学んできた。

この子どもたちには本来であれば一番愛してくれるはずの親、いつでも受け止めてくれるはずの家族、そして辛いことがあれば逃げ帰れる家庭が無い。親や家庭が一番怖い存在になってしまっている。

しかし、まだ10代の子どもである、自分の気持ちを誰かに聴いてもらいたい年頃だ。

家に帰り、「今日学校でこんな楽しいことがあった、、、」と母親に言いかけると、母親の顔が半分腫れ上がっている。「ママ、どうしたの?」、母親は「なんでもない、ママはうっかりしてドアにぶつけたの、、、」。しかし彼には父親に殴られたことは分かっている。

いつも、夕食を全員で食べるのが習慣の家で、ちょっとしたことで、お菜が一品少ない、味噌汁が辛い、なんでもいい、父親が文句をつけるきっかけがあれば、些細なことからは始まり、しまいには激高し、食卓はひっくり返される。部屋中に飛び散った食べ物を片付け、作り直せばすでに10時だ。それでも食べられれば良い方である。

今のこの日本社会に毎日の食事が食べられるかどうか、不安を感じて暮らしている子がどれだけ多いのかと想像すると無力感に陥る。

このような境遇の子どもたち何百人と出会ってきた。その内の何人かは夜の街に消えていってしまい、われわれ支援者の手の届かないところにいってしまう。後ろ髪を引かれる思いを引きずりながらの仕事である。稀に再会することがあると、都会の繁華街の裏通りで怪しげな薬を売っているという男の子や、自分を傷つけるような仕事をしている女の子たち、高校生も中学生もいる。

しかし、多くの子どもたちは学校に行く。それはまぎれもなく友だち、仲間を求めて。そして信頼できる大人、つまり先生たちを求めて行くのである。

地域や家庭で存在を否定され育ってきた子たちで

ある。学校では自分を最大限主張しようとする。それは、授業を妨害する、友だちをいじめる、施設を壊す、先生に暴言をはくという形だけでなく、全く静かにして目立たないようにしている、または完璧な良い子を演じるという形でも表現されていることがある。

彼らの声は「自分はここにいるよ!」「私を認めて!」と聞こえる。

そんな彼らに「苦しそうだなあ?」「解るよ、その気持ち!」というメッセージを届けたいと思い暴力防止プログラムを開発した。

2006年の秋、神奈川県のある中学校の校長先生に「いじめを防止する授業を本校で試してみないか」と声をかけていただいた。翌年の1月に「いじめ防止プログラム」をもって校長先生にプログラムは全5時間の授業時間が必要だと提示すると、最初は「5時間かあ?」と少し驚きの表情をされたが、すぐに教務担当の先生に調整をしてくださるよう学校が動いた。

プログラムは最初の1時間目の全体講演形式以外は全て各クラスごとのワークショップ形式である。

私たちが大切にしているのは、全体講演会もクラスごとのワークショップも、全てを保護者や地域で子どもに関わる活動している方に公開するということである。人権擁護委員、民生委員、主任児童委員、少年スポーツの指導者、学童保育の先生など、地域には子どもを教育・支援する大人が大勢いる。全ての大人にこの問題を一緒に考えてもらいたいと思い、学校に公開をお願いする。

全体講演では体育館で対象となる学年全員と保護者の方たち、先生方全員に私が出会ってきた苦しみを抱えた子どもたちが、目の前にいる何百人という生徒の中にも何人かいるかもしれない。その子たちはこの話を聞くことがとてもつらいかもしれない、怖いかもしれないので、そのような人が苦しさを我慢しているのはプログラムの意味とは矛盾するので、聞きたくないと思ったらいつでも退場していい、自分の気持ちの安心を自分で決めてほしいと伝える。

それを踏まえ、ワークを通し全員で自分の気持ちに気づくこと、どのような感情もたいせつであることを伝える。次にいじめという暴力の影響について事例を挙げ話す。皆、静かに聴いている。

中学校バージョン (小学校は4時間)

プログラム	内 容
全体講演会	対象学年の生徒、教師、保護者、地域の大人への講演会形式のワークショップ。
ワークショップ①	いじめの定義を生徒から出す。加害者像を考える。
ワークショップ②	グループで加害者像を絵で具象化し、暴力の背景にあるストーリーを作る。
ワークショップ③	グループで個々の生徒が自分の好きな部分、努力していることを書き出し共有する。
ワークショップ④	人と人の境界の違いを知り、互いに尊重する。NO!という力とアサーション。

いじめそのものは主に学校で、生徒間でおこるが、その主たる原因は学校にあるのではなく、地域や家庭で問題を抱え苦しんでいる子どもたちが学校という場所でおこす暴力であると考えている。保護者や地域の大人に共通の認識を持ってもらい、学校と協力して子どもたちを支えることがたいせつだと思う。約1週間をおき、クラスごとのワークショップ形式の授業を週1回づつ実施する。

1回目のワークショップでは5つのルール作りをする。①全員が参加する。②授業が苦しく感じる生徒は受けなくても良い。③どのような意見も尊重する。④意見を言うことをパスすることができる。⑤クラスで話し合ったことは他のクラスの生徒に話さない。

これらのルールを確認して、授業の前半は生徒にいじめの定義を確認する。生徒はいじめをどのようにとらえているのか全員から意見を聞き板書する。多くの意見をまとめながら、いじめは集団対一でおこりやすく、長く続くという近年の特徴を伝える。また、恐喝やネットに関わるようないじめが生徒側から出なかった場合は我々ファシリテーターから情報提供する。

後半は、加害者についての生徒のイメージを聞き、同じく板書して行く。ドラえもんやジャイアンからヤンキーまで様々なイメージが出てくるが、暴力的

なイメージだけではなく普通の子、クラスのリーダーというイメージも出る。そしていじめの加害者の心や考えていることを聞いていくと、被害者の反応を楽しんでいる子、自分が強いと思っている子、実は淋しい子、一人では何もできない子、いじめを受けたことがある子、ストレスを抱えている子、虐待を受けている子、親の愛情と教育が足りない子などという、社会の現実が意見としてたくさん出る。生徒たちは加害者の背景や環境を理解しているようだ。

2回目のワークショップはグループになり、1回目の後半に全員で話し合った、加害者のイメージを模造紙に具象化する。恐ろしい大きな顔、しかし顔の半分は泣いている顔であったり、大きな体に壊れたハートを描き込むなど、加害者の2面性を表現するグループが多い。

その絵には必ずグループごとに加害者がいじめをする理由や暴力を振るうようになったきっかけなど、短いストーリーを考えて発表する。クラスに6グループはあるので実際にグループで話し合い、表現し、ストーリーを考える時間は20分ほどしかないが、どのグループもしっかりとした作品を発表する。

いじめや暴力についてのワークショップはここまでで、3回目のワークショップからは自己に向き合い、自尊心のたいせつさに気づいてもらう授業にシフトして行く。

グループワークの形で、共有する1枚の模造紙に各自が自分で自分を好きだなあと思えるところをたくさん書いてもらう。今度は静かに自分に向き合う時間である。しかし、自分の好きなところなんて無いという声がかさかして出る。

そこで次のようなヒントを出す。自分が少しでも人より頑張ってきたこと、例えば家でのお手伝い、弟妹の面倒やペットの世話、塾や習い事、地域でのスポーツなど続けていること、検定などへのチャレンジ。しかし、書かないでほしいことが2つある。それは学校での成績と部活動のことである。つまり学校以外で、家庭や地域ではどのような子どもで、どのように成長し、様々な才能を磨いてきたかをクラス全体で認め合う時間だ。多くの生徒が学校での姿と家庭や地域での姿が違うのである。学校では本来の自分の姿を曝け出すことは憚られ、人が作ったイメージを演じている子どもが加害者になり、被害者にもなりがちではないかと思う。本当の自分を表現しても、誰もが受け入れられるクラスが安心できるクラスである。クラスメイトの知らなかった姿に皆、驚きを隠さない。

いよいよ4回目、最後のワークショップは心理学分野のワークを取り入れたものになる。誰もが他人

とはそれぞれが感じる境界や距離感がある。それが侵略された時は誰でもが不安になるし、NO!という権利があることを学ぶ。また、それを言われた側や周囲で見ている傍観者とそのサインを見落とさないことをロールプレイを使いながら全員で体感する。そして相手によってそのNO!というサインを出すことを躊躇したら?例えば相手が先生、親、先輩、親友、恋人で自分が不安を感じてもNO!と言えなかったら、誰もが持って育ってきたたいせつな「自尊心」「自尊感情」「自己肯定感」、さまざまな言葉でいわれているが、人が生きて行く源となる力が失われて行くことを伝える。

そして自分を守るNO!という力を暴力で行使しないこと、皆が身につけているはずの優しい、素敵なことばをたくさん使ってコミュニケーションをする、相手も自分もOKな関係を築くための「アサーション」の技術を生徒と一緒にロールプレイを通して学び、5週間のいじめ防止プログラムは終了する。この最後の授業でスクールバディという生徒自らいじめを無くす、居心地の良い学校を作る、誰もが笑顔で安心して通ってこれる学校にしたいと活動するグループを編成するために募集する。

スクールバディは個人の任意の活動なので、部活動や塾、習い事を調整しなくては活動できない。スクールバディ学年で募集すると5%~15%程度の生徒が参加する。

彼らには放課後、8時間のトレーニングが課せられる。トレーニングを終了するとスクールバディルームという活動室を与えられ、当番制で決められた日に活動するが、トレーニングでは主にプレゼンテーションと心理学を学ぶ。人の前に立ち、自分の思いをしっかりと伝える力や表現力が求められる。劇を演じたり、ビデオでドラマをつくり文化祭で発表したり、昼休み放送でラジオ番組を流したり、ポスターや新聞を発行する。また、バディルームは相談室も兼ねていて、ときどき相談を受ける事がある。その時にスクールバディだけで解決しようとしない、相談者との信頼関係を築きながら先生につないでいく等の技術を身につけてから活動に入るようにしている。

実際の相談はバディルーム時々訪れる生徒たちとの雑談の中から始まるが、相談内容の秘密も守るが深刻な相談は先生にもつなぐというルールがどの学校のスクールバディルームにも掲げられている。

ある生徒が私に部活動の人間関係について悩みを聞いてほしいと話しかけてきたことがある。私は学校の職員ではないので部活の顧問の先生か、担任の先生に相談するように薦めた。しかし、それは気ま

ずいというので、私はスクールバディに話してみたらどうかというと、その生徒はバディルームに行かなくてもスクールバディに相談すれば味方になってくれることは知っている。だから、今自分は登校出来ていると言った。

彼らの存在そのものが他の生徒に勇気を与えている。3・11から1年後、我々は被災地の中学でもプログラムを実施した。彼らから出たいじめの加害者の気持ちは、大人たちの見せるストレス行動を見ながら過ごすことで抱える「不安」という気持ちだと聞いた。

被害者をケアすることはもちろんいじめ対策では最も優先されることであるが、加害者を排除すればクラスは平和になるかと思うと、そういうものでもない。

誰もがいじめや暴力を振るわないクラスを求めている。これまで出会ってきたクラスで加害者を排除すると言ったクラスは一つもない。加害者に行動を変えてほしいというのが子どもたちの気持ちである。これは仲間を自殺で失った学校でも同じであった。加害者が謝罪の機会を失ったまま登校している姿に、亡くなった子の家に一緒に謝罪に行こうと誘った子もいる。

加害者の気持ちを知りたいはたいせつである。起こってしまったいじめは取り消すことはできないが、当事者がお互いの気持ちを話し合いながら対話を重ねることで壊れてしまった関係を修復することはできる。そして当事者、家族、教師にとっても心を癒すことができる。

「いじめ」をはじめとする思春期の子どもたちの悩みの多くは、初期の段階で生徒同士の会話の中で発信される。大人がなかなか気づくことができないいじめもある。その小さなサインに気づき生徒同士が寄り添い支え合うピアサポートの効果は大きい。彼らの力を信じてこれからもこの活動を続けたい。

## ジャスト・コミュニティと修復的実践

### —対話と参加による学校の問題解決—

竹原 幸太  
(東北公益文科大学)

#### 1. はじめに

2012年の大津市いじめ事件以降、再びいじめが社会問題化されつつある。2006年安倍政権の際に設置された教育再生会議においては、いじめ等を含む問題行動への毅然とした生徒指導としてゼロトレランスが注目され、いじめを起こす生徒の出席停止が議論された。第二次安倍内閣では、教育再生会議を実行会議として再開させていじめ対策が議論されると同時に、心のノートの配布も再開させて道徳教育の強化も着手されている。

こうした動きは、いじめ等の問題行動の未然予防として、規範意識を教える道徳教育を強化し、問題行動を起こす生徒には厳格な処分を事後対応として整備するように思われる。

しかし、問題行動解決をめぐり、学校側が一方向的に教えるべき規範意識を準備して教え込み、守るべき校則等に即して生徒指導を行う方向で子どもの成長発達を促進するのは疑問が残る。筆者は既に別稿において、これらの学校の問題行動対策の問題点を指摘し、学校における修復的実践(Restorative practices、以下RP)の意義について論じてきたが(竹原2007ab、2009、2010)、本稿では道徳教育の観点も加味しながらRPの方途を考えてみたい。

#### 2. ジャスト・コミュニティ(正義の学校共同体)における対話による問題解決

学校全体を通じた道徳教育実践について考えた場合、学校内のあらゆる教育場面で子どもの対話と学校参加を重視し、道徳性の発達促進を目指したコールバーグ(L.Kohlberg)の「正義の学校共同体(Just Community Approach、以下JC)」が注目される。JCは1970年代から1980年代にかけて、「正義(justice)」と「ケア(care)」の原理をつないだ実践として展開され、心理学研究を超えて道徳哲学研究でも学際的に注目された(立山1995)。

JCの学校設立の「教育目的」は、学校コミュニティの諸問題を対話・討議し、積極的な学校参加を通じてルールを作り、「正義」の理念に貫かれたコミュニティを全員で作るということである。

この「教育目的」に基づき、学校は生徒と教師が対等の権利をもつ直接民主主義に基づく共同社会として構成され、小規模な人数で討議するコア・グループミーティング(Core Group Meeting)、日常の悩み事を取り上げる相談ミーティング(Advisor Meeting)、各コア・グループから持ち寄られる議題(薬物問題、盗難問題、教師への脅迫、人種差別等)を討議する議題委員会(Agenda Committee)、校内の規律違反について討議する公正委員会(Fairness Committee)ないし規律委員会(Discipline Committee)<sup>1</sup>、学校全体で規律違反について討議するコミュニティ・ミーティング(Community Meeting)を核としたカリキュラム構成がなされている。

以上、JCではコア・グループ(学級)のような小規模な集団での日常的な討議経験を活かして、コミュニティ・ミーティング(生徒集会)のような大規模な集団での討議へと連結するように導かれており、「共同の意思決定手続き」を通じた学校参加を可能とする仕掛けが「隠れたカリキュラム」として設けられている。換言すれば、無言の中で多数決を取る形式的な討議とは異なり、他者との対話を軸とした討議による民主主義経験が構造的に導かれている。

また、生徒と教師の全員で討議するコミュニティ・ミーティングの最終決議では教師と生徒の投票を行い、教師は対話の促進者(facilitator)ではなく、生徒と対等関係の下で一意見を述べる唱道者(advocater)として位置づけられた。

しかし、実践的には「教育目的」は明確であった反面、対話を促す「教育方法」の「スキル研修機会」が不十分で教師の負担感が浮上し、1987年コールバーグ他界後にJCは衰退し、部分的討議プログラムとして一部の学校に継承されていった(Reimer, Paolitto, Hersh 1983=2004: 253-256)。

その後、文脈は異なるものの、1990年代後半より、ゼロトレランスに代わり、校内の問題行動を予防する教育方法として、被害者、加害者、学級集団の3者が対話を試み、人間関係を強化しながら、問題行動が生じにくい学校コミュニティを作り上げるRPがペンシルベニアやミネソタ等で浮上してきた動きは注目に値する。果たして、両者はどのような共通